

平成28年度
 北海道教育大学
 附属函館幼稚園だより
 NO. 9 【号】
 平成28年11月1日（火）



分身をつくる（思考の視点を広げる）

園長 橋本忠和

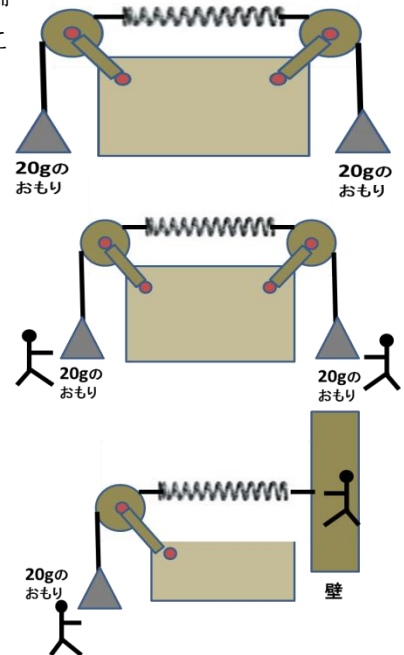
佐伯胖は1978年に出版された『イメージ化による知識と学習』の中で、「擬人的認識論」*を提唱しています。この擬人的認識論とは、自分の分身(コビト)を人、もの、ことへと派遣し、その分身に派遣先の世界の中で様々な体験をさせ、その分身に体験報告をさせ、それを統合した時に理解が生まれるというものです。例えば、「10g重で3cmのびるばねを右図上のように両端におもりをつるした。ばねののびは何cmか？」という問題の場合、ついおもりが2個だから2倍で「12cm」と答えがちです。でも、よく考えると右図中・下のように分身であるコビトを動員すると壁につないで引っ張る場合と同じであり、「6cm」であることがわかります(どちらも2人の分身が引っ張っている)。

このように自分の思考(見方・考え方)を振り返ってみると、事象を分析し解を導くのに、その事象の中に分身を動員して考えることで「思考の視点をひろげ」理解を得てきたように思います。この分身で「思考の視点を広げる」ことは人間関係において「他人の立場に立つ」とか「ひとの身になって考える」という「共感力や「道徳心」を育む上でも大切になると考えます。

幼稚園での園児の活動を見ていると写真のような「みのむしに変身した自分」の作品(4歳児)を見つけました。まさに、蓑虫の映像からイメージを広げ、もう一人の自分を作っています。これは「思考の視点を広げる」ことへの一歩とも考えられます。「表現=子ども」と捉え、その表現の中に今後の育ち・学びの芽が多く存在しています。その価値を認識にして、園では園児の表現を大切に引き出し伸ばしていきたいと考えております。「写真 4歳児 みのむし」

園児の表現活動の様子を味わっていただく作品・動画が、函館駅前のキラリス函館の3階に開設された「はこだてみらい館」に10月15日から展示してあります。園児の表現活動が市民のみなさんに向け発信されていますので、ぜひ、訪れていただき、施設のトラクション(4階のプレイランドも面白いです)ともに楽しんで下さい。

*佐伯胖『イメージ化による知識と学習』東洋館出版社1978年



18日の園内連絡入学説明会はゆき組保護者対象です。(9時20-50分：遊戯室)